

# 研究版とは何か

——ボード・プラハタの理論と実践から

富塚 祐

はじめに

ドイツの編集文献学においては、様々な版の種類 (Ausgabentypen) の類型と、それに応じた具体的な編集方針をめぐる議論が続けられてきた。その前提には、人文学のテキストの読者が持つ知識や学術編集版 (Edition) に対する要求には多様な水準があるという認識がある。そのような中で、たとえば、研究者に向けては「史的批判版 (historisch-kritische Ausgabe)」という名の版が、研究者や学生を含む、学術的、文学的な関心を有する読者に向けては「研究版 (Studienausgabe)」が、一般読者向けには「普及版 (Leseausgabe)」と呼ばれる版がそれぞれ想定されてきた<sup>1</sup>。他にも様々な版が類型化される中でも、当該分野でこれまで主たる問題となってきたのは、研究の基盤となる史的批判版のあり方であった。特に現在では、紙ではなくデジタルで、すなわちデータベースとしての史的批判版のあり方をめぐる議論が展開されている<sup>2</sup>。

しかし、史的批判版以外の版が必ずしもなおざりにされてきたわけではない。1989年の『シラー年鑑』に掲載されたウルリヒ・オットーの議論がその一例である。オットーは、時間的、経済的に莫大な費用を要求する史的批判版を今後も製作する必要があるのかどうか、その意義を問い直そうと呼びかけた。そしてそこでは、学術的な責任のもとで編集された研究版が、史的批判版に代わる現実的に製作可能な学術編集版として示唆されている<sup>3</sup>。この議論に対して翌年の『シラー年鑑』には、史的批判版を擁護する論者が応答として寄せられたが<sup>4</sup>、実際に史的批判版の製作は主に経済的な理由からとん挫する危機に瀕しているという報告もある<sup>5</sup>。また、史的批判版の実現は部分的なものに留

[付記]

本稿は、成城大学国際編集文献学研究センター主催第1回ワークショップ「ドイツ編集文献学を学ぶその1」(2022年6月18日)での口頭発表「学習版とは何か」に基づき、大幅に加筆修正したものである。ご助言、ご指摘賜った方々に深謝申し上げる。

<sup>1</sup> Vgl. Bohnenkamp, Anne: Textkritik und Textedition. In: Heinz Ludwig Arnold und Heinrich Detering (Hrsg.): *Grundzüge der Literaturwissenschaft*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1996. S. 179-204, hier S. 193f.; Göttische, Dirk: Ausgabentypen und Ausgabenbenutzer. In: Rüdiger Nutt-Kofoth u. a. (Hrsg.): *Text und Edition. Positionen und Perspektiven*. Berlin: Erich Schmidt Verlag 2000. S. 37-63, hier S. 53.

<sup>2</sup> Vgl. 明星聖子:「編集文献学の可能性」『書物学』第17巻、2019年、2-7頁。

<sup>3</sup> Otto, Ulrich: Dichterwerkstatt oder Ehrenggrab? Zum Problem der historisch-kritischen Ausgaben. Eine Diskussion. In: *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft*. 33, 1989. S. 3-6.

<sup>4</sup> Vgl. *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft*. 34, 1990, S. 398-428.

<sup>5</sup> Vgl. Roloff, Hans-Gerd: Beobachtungen zum Typ ‚Lese-‘ bzw. ‚Studien-Ausgaben‘. In: *editio. Internationales Jahrbuch für Editions-wissenschaft*. 16, 2002. S. 133-142, hier S. 137.

まっており、研究底本に研究版が用いられている作家、作品の例も存在する<sup>6</sup>。このような事情を考えると、史的批判版のみならず、研究版にももっと目が向けられてよいだろう。

以上の関心から本稿は、研究版の編集をめぐる問題について考察する。特に、ボード・プラハタの議論と編集実践から考えたい。彼が1997年と2020年の2度著した、『編集文献学 (Editionswissenschaft)』というタイトルの書籍において、研究版はどのようなものとして論じられているのか<sup>7</sup>。また、彼が近年編集した、研究版の名を冠した刊行物ほどのような編集を経たものなのか。この2点を検証することで、史的批判版に対する製作コストの低さにとどまらない、より積極的な研究版の意義を考察する。

## 1. プラハタの議論 (1) ——1997年の著書にみる基本的論点

プラハタは、1997年の著書『編集文献学——近現代のテキストを学術的に編集する方法と実践への入門』で、研究版についてはまず、先行する史的批判版に基づいたものと、そうでないものに分けて論じている<sup>8</sup>。

彼は史的批判版に基づいた研究版が、研究版のあるべき姿である旨を述べる。その中でも、理想的なケースはヘルダーリンの小シュトゥットガルト版 (Kleine Stuttgarter Ausgabe) という名の著作集——詳しくは後述する——であるという。小シュトゥットガルト版は大シュトゥットガルト版 (Große Stuttgarter Ausgabe) に基づいて刊行された。これらの書名には研究版あるいは史的批判版という名称は見られないが、プラハタは大シュトゥットガルト版を「史的批判的な」ものとして捉え、小シュトゥットガルト版を研究版の一例とみている<sup>9</sup>。いわく、大シュトゥットガルト版は、テキスト批判、すなわ

6 たとえばゲーテの場合、1980年代から90年代にかけて出版されたフランクフルト版 (Goethe, Johann Wolfgang: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. Frankfurter Ausgabe*. Hrsg. von Dieter Borchmayer u. a. 45 Bänden. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 1985-1998.) およびミュンヘン版 (Ders.: *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens. Münchner Ausgabe*. Hrsg. von Karl Richter u. a. 33 Bänden. München: Carl Hanser Verlag 1985-1998.) は研究版とみなされており、これらが近年、研究底本として用いられている。Vgl. Nutt-Kofoth, Rüdiger: Goethe-Editionen. In: Rüdiger Nutt-Kofoth und Bodo Plachta (Hrsg.): *Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editionsgeschichte*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag 2005. S. 95-116, hier S. 108ff.; 矢羽々崇: 「著作集編集と『古典』の成立——ゲーテ『若きヴェルテルの悩み』」明星聖子・納富信留編『テキストとは何か——編集文献学入門』慶應義塾大学出版会、2015年、37頁。

7 これら2冊は出版社、判型の異なる別の書籍である。書誌情報については注8及び23を参照。

8 以下特に言及がない限り、本稿で述べられる1997年時点でのプラハタの見解は、以下の資料による。Plachta, Bodo: *Editionswissenschaft. Eine Einführung in der Methode und Praxis der Edition neuerer Texte*. Stuttgart: Reclam 1997. S. 16-19. なお本書は2006年と2013年に増補改訂版が出版されている。

9 大シュトゥットガルト版は少なくともヘルダーリンのテキスト編集史においても史的批判版のひとつとして紹介されている。また、別の作家の史的批判版のモデルとして扱われてもいた。Vgl. Hoffmann, Dierk O. und Zils, Harald: Hölderlin-Editionen. In: Rüdiger Nutt-Kofoth und Bodo Plachta (Hrsg.): *Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editionsgeschichte*. a. a. O. S. 199-245, hier S. 206-221. 小シュトゥットガルト版を研究版として明示している文献は筆者が確認した限りみられなかった。プラハタによる独自の判断である可能性があり、本稿はそれに依拠しているが、ここで書名と版の種類の問題について触れたい。個別の学術編集版が、版としていかなる種類のものに属するののかは、判断が難しい。たとえばカフカの場合、史的批判版の名を冠した現在刊行中の全集 (Kafka, Franz: *Historisch-kritische Ausgabe*

ち「テキストの伝承を、その信頼性に関して学術編集的に検証すること」<sup>10</sup>を経たテキストを提供している。ゆえに、それを受け継いでいる小シュトゥットガルト版が研究版として理想だと述べているのである。すなわち、史的批判版に基づいた研究版を理想視する理由には、史的批判版がテキスト批判の原則に基づいたテキストを提供している、という前提がある。

他方で彼は史的批判版に頼れない研究版の存在についても言及している。いわく、それは編集上の先駆的な仕事を担う場合があり、史的批判版が編集上の問題を最終的に解決するまで、「暫定版 (Interims-Ausgaben)」として機能する。

続いて彼は、研究版が達成すべき編集上の基準について論じる。そこで論じられるのは、第一に、このような版は先にみたように、テキスト批判の原則に則ったテキストを提示する、という目的が達成されるものでなければならない、ということである。その際、「テキストの稿 (Textfassungen)」のすべてが完全に再現されるわけではないという留保が付けられる。なぜなら、完全な再現は史的批判版に委ねられるべきものであるとしているからである。対して研究版においてはこのような作業は常に選択的に行われるという。

次に問題になるのは、テキストに付随する「注釈 (Kommentar)」である。注釈は研究版にとっては不可欠の構成要素であり、ここでは、テキストに書かれている歴史的状況を説明するために必要な事実に関する言及や、現在のテキストの理解、競合する解釈上のアプローチについての情報が提供される、という。この、注釈を付して、テキストの分析的・解釈的側面を前面に押し出すことは、史的批判版とは対照的な研究版の目的として掲げられる。というのは、史的批判版の最重要目的は「歴史的、伝記的、私的な要素からなる複雑性の中にある生成の過程を、可能な限り包括的にドキュメンテーションし、説明する」<sup>11</sup>ことにあるとプラハタは理解しているからである。すなわち、一言で「注釈」といっても、史的批判版は創作過程の歴史にまつわる情報を提供することに重きを置くのに対し、研究版はテキストの内容に関わる情報の提供に重点を置いている。

研究版の編集に関して最後にプラハタは、テキストの表記に関する手入れの問題を取り上げる。そこでまず論じられるのは、古い正書法や句読法に基づいて書かれたテキストを、現代の規則に合わせるために手を入れるか否か、という点についてである。いわく、この問題は「未だに議論が分かれている」。一方では、1985年にドイツ古典作家叢書シリーズが、1700年から1900年までのテキストの場合は現代の綴りに合わせるよう手を入れるという方針を示したように、表記の「現代化」を是とする立場がある。こう

---

*sämtlicher Handschriften, Drucke und Typoskripte*. Hrsg. von Roland Reuß und Peter Steangle. Frankfurt am Main: Stroemfeld/ Roter Stern, Göttingen: Wallstein Verlag [bis 2020] 1997-)は、その内実に鑑みて「写真版」と呼ぶべきものとされる。Vgl. 明星聖子:「編集の善悪の彼岸——カフカと草稿と編集文献学」『文学』第11巻第5号、2010年、188-202頁。つまり、書名に掲げられている版の種類は必ずしも鵜呑みにできるものではない。また、大/小シュトゥットガルト版がそうであるように、書名に版の種類が入っていない場合、理論や編集史を踏まえ、第三者によって判断が下されることがあり、そうした状況を踏まえて各版の位置づけを理解する必要がある。

<sup>10</sup> Plachta: a. a. O. S. 140.

<sup>11</sup> Ebd. S. 14.

した立場は、現在用いられている表記にあらためることで読者の関心を高める、すなわち商品としての適性を高めることができると主張する、という。他方、このような手入れに反対する立場は、「古く」異質な綴りや句読点の打ち方は、古典的なテキストを歴史的なものと理解するためのしるしとして機能すると主張する、と整理している。また、このような議論に関連して、過去に用いられていた音韻構造に手を入れるか否か、という議論の存在も紹介するのだが、この点については歴史的な音韻形式が意味する機能を曖昧にすることが多く、その結果、テキストが第三者の影響を受けるということを理由に、「受け入れがたい」ものであると、その立場を明らかにしながら論じている。

みてきたように、1997年時点のプラハタは研究版の編集方針について、5点にわたって論じている。史的批判版に基づくものが望ましいこと、テキスト批判を経たテキストを提供すること、テキストの解釈にかかわる注釈を付すこと、そして正書法や句読法に基づいた手入れについては議論が分かれていること、音韻構造については手を入れるべきではないこと、である。

## 2. 研究版の「理想」としての小シュトゥットガルト版

先に確認した通り、プラハタは史的批判版に基づいた研究版、特にその中でもヘルダーリンの小シュトゥットガルト版を理想とみていた。この小シュトゥットガルト版について、ここで少し詳しくみてみたい。

小シュトゥットガルト版は、1944年から1962年にかけて、全6巻で出版された。フリードリヒ・バイスナーが編集したこの版は、同じくバイスナー編集の大シュトゥットガルト版(1943-1985年、全8巻)に基づくものである。

この小シュトゥットガルト版は、大シュトゥットガルト版の第6巻までを再編したものである。これら6巻のうち、大シュトゥットガルト版は第3巻『ヒュペーリオン』と第5巻『翻訳』以外はテキスト(Text)篇と異同(Lesarten)篇の2冊1組であるのだが、小シュトゥットガルト版として再編するにあたり、これら2冊はひと回り小さな1冊にまとめられている。そしてその際、異同篇の情報はかなりの程度省略されている。

大シュトゥットガルト版の異同篇では、作品ごとに、まず作品の成立時期に関する情報が記述されている。続いて、「伝承(Überlieferung)」という項目が立てられ、手稿および初出の媒体に関する情報が与えられる。続く項目「異同(Lesarten)」では、バイスナーが最終的に構築したテキストと初出および手稿上のテキストとの相違や、手稿上の修正の形跡が示され、「解説(Erläuterungen)」という項目において、語が示している意味などの、内容に関する説明が与えられている。

これらの情報が小シュトゥットガルト版ではどうなっているのか。例として、後期詩のひとつで、1802年から1805年頃に成立したと見られている「追想(Andenken)」の場合を確認しよう<sup>12</sup>。この詩が収められているのは、第2巻『1800年以降の詩』である。

<sup>12</sup> 「追想」の成立時期については以下を参照。矢羽々崇：「4つのヘルダーリン著作集——史的批判版の実際」『書物学』第17巻、2019年、27-32頁。

「追想」の場合、大シュトゥットガルト版の異同篇に記載されていた情報のうち、小シュトゥットガルト版に収められているのは、「解説」部分のみである。すなわち、この詩の成立時期に関する記述や、「伝承」「異同」部分は小シュトゥットガルト版には収められていない。そして、その「解説」においても、多くの部分が省略されている。大シュトゥットガルト版で約5ページ半にわたっていた、この詩の「解説」部分は、小シュトゥットガルト版では一回り小さな判型で2ページ半弱にまとめられている<sup>13</sup>。

小シュトゥットガルト版におけるこの省略については、巻末で「簡略化した」と述べられているのみであり、具体的な方針については明言されていない<sup>14</sup>。とはいえ、省略されている部分を見てみるとその方針はある程度推測できる。まず、作品の成立時期に関する記述、「伝承」「異同」が全く収められていないことから、小シュトゥットガルト版は内容理解に関わる解説のみを提供する、という方針を打ち出していると考えられる。また、「解説」部分のうち省略されている箇所については、ヘルダーリンの著作以外の文献が引用されている記述、また、ドイツ語以外の言語、この場合は特にギリシャ語を用いて説明している箇所が目立つ。対してヘルダーリンの他の作品を引用しながらなされている解説については残されていることから、小シュトゥットガルト版に収録されている範囲で相互に参照できる部分、そしてドイツ語で書かれている部分に限って「解説」部分を残したのではないかと思われる。

この点については、確かにプラハタが論じていた注釈のあり方に近い。彼によれば、テキストの内容に関わる注釈は研究版の核心をなすのであった。小シュトゥットガルト版の場合、部分的に省略されているとはいえ、内容にかかわる解説を残している点はおそらく彼にとって十分に評価できる点であったはずだ。また、大シュトゥットガルト版にあった「伝承」や「異同」という項目が小シュトゥットガルト版でカットされている点についてはプラハタにとってさしたる問題ではなかったと思われる。なぜなら、この部分は史的批判版が注力すべき「高度に専門的な」<sup>15</sup>ものだからである。よって、小シュトゥットガルト版にこうした情報を収めずに、大シュトゥットガルト版でのみ提示するという切り分けがプラハタにはむしろ好例と映ったのだろう。

続いて確認したいのは、議論が分かれているとされた、テキストの表記である。小シュトゥットガルト版のテキストは、基本的には大シュトゥットガルト版に収められているものを引き継いでいるが、異なる部分もある。それは、正書法や句読法に基づく手入れが行われているか否かに起因する。

小シュトゥットガルト版の巻末には、刊行時の正書法に基づいてテキストに手を入れていること、アポストロフは特定の場合を除いて削除していること、句読点の打ち方についても当時の語調を維持しつつも今日、つまり刊行当時の用法にも近づけているという点が、大シュトゥットガルト版に対する違いとして挙げられている。ただし、音

<sup>13</sup> Vgl. Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke (Große Stuttgarter Ausgabe). Gedichte nach 1800. Lesarten*. Bd. 2.2. Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag 1951. S. 800-807.; Ders.: *Sämtliche Werke (Kleiner Stuttgarter Ausgabe). Gedichte nach 1800*. Bd. 2. Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag 1953. S. 465ff.

<sup>14</sup> Hölderlin: *Sämtliche Werke (Kleiner Stuttgarter Ausgabe)*. a. a. O. S. 539.

<sup>15</sup> Plachta: a. a. O. S. 16.

韻や方言については元の状態を反映しているとのことである<sup>16</sup>。

再び「追想」を例に確認しよう。表1は、「追想」の第5節——この詩においては唯一手稿が遺っている部分である——の、大シュトゥットガルト版と小シュトゥットガルト版の表記を写して並べたものである。異なっているのは、Spiz'/ Spitz、prächt'gen/ prächtgen、giebt/ gibt、Gedächtniß/ Gedächtnis、Lieb'/ Liebの、綴りとアポストロフの有無である。大シュトゥットガルト版掲載のテキストをそのまま小シュトゥットガルト版が引き継いだという形にはならないが、こうした手入れが行われることで、読者に馴染みのある綴りでテキストを提供することになる。

Nun aber sind zu Indiern Die Männer gegangen, Dort an der luftigen <i>Spiz'</i> An Traubenbergen, wo herab Die Dordogne kommt, Und zusammen mit der <i>prächt'gen</i> Garonne meerbreit Ausgehet der Strom. Es nehmet aber Und <i>giebt Gedächtniß</i> die See, Und die <i>Lieb'</i> auch heftet fleißig die Augen, Was bleibet aber, stiften die Dichter.	Nun aber sind zu Indiern Die Männer gegangen, Dort an der luftigen <i>Spitz</i> An Traubenbergen, wo herab Die Dordogne kommt, Und zusammen mit der <i>prächtgen</i> Garonne meerbreit Ausgehet der Strom. Es nehmet aber Und <i>gibt Gedächtnis</i> die See, Und die <i>Lieb</i> auch heftet fleißig die Augen, Was bleibet aber, stiften die Dichter.
--	---

表1 大シュトゥットガルト版(左)と小シュトゥットガルト版(右)における「追想」第5節の比較。それぞれで異なる語を斜体で表記した(筆者による)。出典：Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke (Große Stuttgarter Ausgabe). Gedichte nach 1800. Text.* Bd. 2.1. Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag 1951. S. 189.; Ders.: *Sämtliche Werke (Kleine Stuttgarter Ausgabe).* a. a. O. S. 197f.

小シュトゥットガルト版は一言でまとめれば、正書法や句読法に基づく手入れの行われたテキストと、その解釈にかかわる注釈を提供するものであった。これが、プラハタのみる理想の一例である。

### 3. プラハタ編集の研究版——レッシング『賢者ナータン』を例に

先に取り上げた1997年の著書発表後、プラハタは実際に研究版の編集に取り掛かっている。そのうち特に近年のものに焦点を当て、上記でみた理論的記述や、そこで好例とみられていた小シュトゥットガルト版と照らし合わせながら、編集方針を確認したい。

シュトゥットガルト研究版 (Stuttgarter Studienausgaben) というシリーズがある。アントン・ヒアーゼマンという出版社が手掛けているこのシリーズは、2017年から2023年11月現在までに、6冊の研究版を出版している。そのうちプラハタは、ゲーテ『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』(2017年)、ゲーテほか『エグモント』(2019年)、レッ

<sup>16</sup> Hölderlin: *Sämtliche Werke (Kleiner Stuttgarter Ausgabe).* a. a. O. S. 539.

シング『賢者ナータン』(2023年)の3冊の編集に携わっている<sup>17</sup>。本稿ではそのうち『賢者ナータン』の編集の大枠をつかむ形で、プラハタの編集実践を検討する。

まず確認しなくてはならないのは、プラハタが編集した『賢者ナータン』は、史的批判版を含む何らかの先行する版に基づいているものではないということである。つまり、これは彼があるべき姿とみていた形とは異なっている。これは、おそらく以下のことに起因する。すなわち、理論上は史的批判版が提示したテキストを受け継ぐ研究版が「理想」であるとしても、実際のレベルにおいては、先行する史的批判版を無批判に受け継ぐのではなく、むしろそれが有する問題点を解決することに主眼を置いた版が研究版として位置づくということも考えられる<sup>18</sup>。というのは、作家や作品にかかわらず、史的批判版は必ずしも無批判に読者、編集者に受容されるものではなく、むしろ都度批判の対象となり得るからである。こうした前提に立つと、史的批判版を編集した者が同様に研究版にも着手しない限りは、研究版の「理想」を実現することは困難であろう。実際、筆者が確認した限り、史的批判版に基づいて対を成すような構造の研究版は、ヘルダーリンの大／小シュトゥットガルト版以外、ほとんど例がない<sup>19</sup>。よって、当該作品の史的批判版を編集していないプラハタが、既存の史的批判版と対を成す研究版の編集を行わなかったのは不自然ではないように思われる。プラハタが既存の『賢者ナータン』の版のどのような点を問題視し、乗り越えようとしているのか、彼の言葉を借りればどのような点で編集上の先駆的な仕事を行っているのかについてここでは論じる準備はないが、少なくとも、自らが新たな編集作業を行うという選択を行ったということはわかる。

内容の検討に移ろう。この研究版のテキストは、1779年の初版に基づいて構築されたものからはじまる。そこでは、同年に出版された別の出版稿との異同が、脚注形式で示されている。続いて、「場面 (Szene)」「抜粋、メモ (Exzerne, Notizen)」「場面草案

17 Goethe, Johann Wolfgang: *Götz von Berlichingen*. Hrsg. von Bodo Plachta. Stuttgart: Anton Hiersemann Verlag 2017.; Goethe, Johann Wolfgang u. a.: *Egmont*. Hrsg. von Bodo Plachta. Stuttgart: Anton Hiersemann Verlag 2019.; Lessing, Gotthold Ephraim: *Nathan der Weise*. Hrsg. von Bodo Plachta. Stuttgart: Anton Hiersemann Verlag 2023. なお本シリーズは大シュトゥットガルト版／小シュトゥットガルト版と直接的な関係はない。

18 たとえば、1990年代以降のヘルダーリン・テキストの近年の編集実践例は、それまでの史的批判版の成果を踏まえつつ、新たに企図された研究版ないし普及版として解されている。Vgl. Metzger, Stefan und Kreuzer, Johann: Editionen. In: Johann Kreuzer (Hrsg.): *Hölderlin Handbuch. Leben – Werk – Wirkung*. 2., Aufl. Berlin: J. B. Metzler Verlag 2020. S. 3-14.

19 ニーチェ全集、書簡集には、史的批判版ではなく批判版に基づいた「批判的学習版」がある。Nietzsche, Friedrich: *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*. Hrsg. von Giorgio Colli und Mozino Montinari. Neuausgabe. München /New York: Deutscher Taschenbuch Verlag 1999.; Ders.: *Sämtliche Briefe in 8 Bänden. Kritische Studienausgabe*. Hrsg. von Giorgio Colli und Mozino Montinari. München / New York: Deutscher Taschenbuch Verlag 2003. これらがどのようなものであるのかについては、今後の検討課題としたい。なお、プラハタは大／小シュトゥットガルト版と類似した組み合わせとして、テキスト篇 (Textband) と資料篇 (Apparatband) の2冊が対になった批判版カフカ全集 (Kafka, Franz: *Schriften Tagebücher Briefe. Kritische Ausgabe*. Hrsg. von Malcolm Pasley u. a. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag 1982-) と、そのうちテキスト篇のみが切り取られたペーパーバック版を挙げているが、こちらは小シュトゥットガルト版の例とは異なり、資料篇に収められている情報が一切ない。Plachta: a. a. O. S. 16.; z. B. Kafka, Franz: *Der Proceß. Roman. in der Fassung der Handschrift*. Hrsg. von Malcolm Pasley. Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag 1994.

(Szeneentwürfe)」「序文の草案 (Entwürfen zu einer Vorlede)」が提示されている<sup>20</sup>。

プラハタの理論に鑑みてこれらのテキストに関して取り上げたいのは、その表記についてである。ここでは、現代の正書法や句読法に則った手入れは行われておらず、そのままの形が提示されている。つまり、プラハタが理想的な例とした小シュトットガルト版とは異なっているのである。1997年の著作では彼の立場は明らかではなく、少なくともこのような手入れには強く反対していないものと思われたが、それから20年以上を経て行われた編集作業においては正書法や句読法に基づくテキストの手入れは行わず、当時の表記に従う、という方針を選択していることがわかる。

当該研究版の後半部、「補遺 (Anhang)」についても確認しよう。この部分では、目次に沿って言えば、「この版について (Zu dieser Ausgabe)」「生成と伝承 (Entstehung und Überlieferung)」「テキストの土台とテキスト形態 (Textgrundlage und Textgestaltung)」「文受 (Wirkung)」「文献 (Literatur)」について記述されている。ここでは、当該作品が執筆、出版されるまでの経緯や当時の影響、そしてこの研究版の編集方針などがまとめられている<sup>21</sup>。その代わりに、プラハタが述べていた「現在のテキストの理解や競合する解釈上のアプローチ」についての情報は提供されていない。彼のかつての理論的記述、そして小シュトットガルト版とは異なる部分である。

このようなプラハタの方針は別の出版社から刊行されたテキストの編集においても一貫している。たとえば2020年にレクラムから出版されたレッシング『ミンナ・フォン・バルンヘルム』は、おそらく紙幅の関係と思われるが、『賢者ナータン』に比べると「補遺」は確かに簡素なものになってはいる。しかしながら、やはりそこで示されているのは「この版について」「伝承」「テキストの土台とテキスト形態」「生成」「文献」、それに加えて「初演 (Uraufführung)」についてである<sup>22</sup>。

プラハタ編集の研究版は、彼が1997年に著した研究版に関する記述、そしてそこで好例とみられていた小シュトットガルト版とは異なる部分があった。これは、著書の発表から20年以上の時を経て、彼が実際に編集作業に携わる中で、考え方が変化していったためと思われる。

#### 4. プラハタの議論 (2) ——2020年の著書における選択肢の拡張

プラハタが研究版を編集するにあたっては、1997年の著作で紹介されていたものとは異なる編集アプローチが採用されていた。このことは、2020年の著作『編集文献学——近現代ドイツ語ドイツ文学の学術版編集の歴史、方法、実践へのハンドブック』にも反映されているようにみえる<sup>23</sup>。

<sup>20</sup> Vgl. Lessing: *Nathan der Weise*. a. a. O. S. 3-191.

<sup>21</sup> Vgl. ebd. S. 193-256.

<sup>22</sup> Vgl. Lessing, Gotthold Ephraim: *Minna von Barnhelm. Studienausgabe*. Hrsg. von Bodo Plachta. Stuttgart: Reclam 2020. S. 133-159.

<sup>23</sup> 以下で述べられる2020年のプラハタの見解は、下記の資料による。Plachta, Bodo: *Editionswissenschaft. Handbuch zu Geschichte, Methode und Praxis der neugermanistischen Edition*. Stuttgart: Anton Hiersemann Verlag



その記述は、やはり史的批判版に基づいている研究版が理想的なケースであるという旨からはじまる。そしてそうではない場合は、研究版は先駆的な編集作業を担うことになり、暫定版として機能する、とする。このことについて変わりはない。ただし、史的批判版に基づいた研究版の例として挙げられていたはずの小シュトゥットガルト版への言及が消えている。

続いて、研究版は19世紀以来、出版社が主導となって製作されるものであり、それゆえ手ごろな価格でなければならず、紙幅に制限が加わる、という、1997年の著作にはなかった記述が追加される形で、研究版が選択的な編集を経たものである旨が述べられる。この点についても若干の追記はあるが、研究版においては編集は選択的になる、という論旨に変わりはない。

続いて、研究版に求められる編集上の要件が説明される。それはすなわち、批判的に検証されたテキストが提供されること、そして不可欠のものとして、詳細な注釈が加えられることである。基本的な部分については1997年のものと変わらないが、注釈については、そのあり方について、ふたつの方向性を分ける形で新たな記述がなされている。一方では、1997年の記述にあったように、テキストに書かれている歴史的状況を説明するために必要な事実に関する言及、また、テキストの現在の理解や競合する解釈上のアプローチへの言及、という要素を挙げる。同時に「注釈は伝承、生成、受容に関するドキュメンテーションに集中するということもあり得る」。すなわち、テキストの内容理解に直接かかわるものではなく、テキストが作者によって書かれてからわれわれの手元に届くまでの歴史や、テキストがどう読まれてきたかという問題に関する情報を提供する、という選択肢について新たに論じているのである。彼が近年編集した研究版に収録されているのは、この書き加えられた部分であることに気が付く。

最後に彼が問題とするのは、やはり表記に関する手入れである。先ほどと同じく正書法や句読法に基づく手入れについてみていこう。ここでは、研究版は今日、歴史的なオリジナルのテキストを「原器」に合わせることを自覚している、すなわち過去の正書法や句読法に基づいて書かれたテキストはそのままにすべし、という見解が理論上は合意に達していることが示される。また、1988年の『エディツィオ』に掲載された、研究版における「学術的地位を著しく低下させる」「あらゆる種類の現代化」を非難する「出版社への勧告」を援用する<sup>24</sup>。しかしやはり、「現代化」されたテキストを提供する研究版も存在しており、こうした立場は手入れを通じた、読者の関心、ひいては売れ行きの向上を期待している旨を述べる。ここで、プラハタがどちらかの立場を明確に打ち出しているようには読むことができない。実際に研究版を編集するに際してこうした手入れは行わなかったにもかかわらず、である。また、この著作を出版する前にプラハタが著した論考においては、1997年の著作が「できるだけ慎重に、どちらかの側にはっきりと立つことなく問題を提示しようとした」ものであるがゆえに、自らの立場を明らかに

2020. S. 17ff.

<sup>24</sup> Vgl. [Zeller, Hans u. a.]: Empfehlung an Verlage von Studienmausgaben. In: *editio. Internationales Jahrbuch für Editions-wissenschaft*. 2, 1988. S. 228.

しなかったことを省みつつ、「歴史的テキストを現代化する介入から離れよ」と明言している<sup>25</sup>。よって、彼自身が「現代化」に反対しているのは明らかである。しかし2020年の著作でこの立場は明示されていない。その背景については以下のように推測してみたい。つまり、正書法や句読法に基づく手入れを行うことについては、彼自身は行わない、という立場を取るものの、その選択肢の存在自体は認めているのではないか。

他方で音韻に関する手入れについては議論の存在こそあるが、これについては変わらず、明確に「容認できない」ものである、とする。

『編集文献学』と題した2度目の著作を発表するにあたり、研究版に関する記述には若干の変更がみられた。それは主に、注釈について、伝承、生成、受容の歴史に関する説明に集中するタイプの研究版のあり方を新たに取り上げることで、研究版の編集における選択肢を拡張している点にみられる。そしてこの記述を追加するにあたっては、彼自身による研究版の編集経験、構想が影響を与えているように思われる。

この著作において小シュトゥットガルト版への言及が消えた理由もおそらくここにある。すなわち、小シュトゥットガルト版は、史的批判版とみなしうる大シュトゥットガルト版に基づいているとはいえ、そこで採用された編集方針はあくまで複数ある選択肢から選び取られたものである。2020年の著書は、小シュトゥットガルト版を含め、何らかの選択肢を選び取っている実際例への言及を減らすことで、研究版の編集における選択肢の広さを強調しようとしているのではないだろうか。

おわりに

プラハタの2020年の著書に即せば、研究版の編集方針にはいくつかの選択肢がある。

まず、先行する史的批判的に基づいて研究版を製作するか、まったく新たな研究版の編集に着手するか、という選択肢が存在する。

そして、注釈のあり方について。彼は、テキストの内容、解釈に関わる点に集中するか、伝承、生成、受容といった、テキストの歴史についての説明に集中するか、という、ふたつの方向性を提示している。

続いて、テキストの表記、すなわち、正書法や句読法に基づく手入れが問題となる。こうした手入れを行って、読者の関心、ひいては商品としての売れ行きの向上を期待するか、過去に書かれたテキストの歴史性をそのままの形で伝えるか、という選択肢がある。

この点に、研究版の意義をみたいと考える。すなわち、研究版は、過去の編集史を受けて、さまざまなあり方を考えることができるのであり、その多様性に利点を有しているのだ、と。

いま仮に、ある作家や作品の研究版を新たに編集することにしよう。その編集史を辿った時に、先行する史的批判版があることが判明した場合は、それを受け継ぐか

---

<sup>25</sup> Plachta, Bodo: Nochmals. Für eine historische Edition! In: Peter Eisenberg (Hrsg.): *Der Jugend zuliebe. Literarische Texte, für die Schule verändert.* Göttingen: Wallstein Verlag 2010. S. 95-103, hier S. 95f und 101.

どうか、あるいは受け継ぐとして、どのように受け継ぐのか、判断を下すことになる。また、すでに内容理解にかかわる注釈が充実した版が存在している場合は、伝承や生成といった問題の記述に注力した注釈を新たに提供することになるだろう。もちろん、逆の場合もあり得る。

正書法や句読法に基づく手入れに関しても同様である。ここでは、想定読者という問題から考えてみたい。研究版の想定読者が研究者や学生を含む、学術的、文学的な関心を有する者であることは冒頭で述べた。プラハタは論じていないが、そのうち、研究者の利用を中心に据えるか、学生や初学者が手に取ることを第一に考えるか、という選択肢があるはずだ。研究者の利用を第一に考えた、研究底本としての性格が強い研究版を作ろうとした場合、過去に用いられていた表記はそのまま残しても、研究者の読みの妨げになるということは考えにくい。よって、編集者という第三者の手入れを最大限排した、作家が書いたままの綴りでテキストを提供する方針を打ち出すことができるだろう。また、中心となる想定読者を学生や初学者と設定した場合、読みやすさを重視して、むしろ手入れを行った方がよい、と考えることもできるかもしれない。こうしたアプローチの複数性が、研究版と一言にいても、何巻にもわたる、いわゆる全集と言えるような規模のものから、薄く小さなレクラム文庫版にまで広がりがあり、その内容もさまざまである背景であろう。

研究版の意義は、史的批判版と比べた時の実現可能性の高さにととまらない。編集アプローチの多様性にこそ、その意義を有している。

#### 参考文献

- Bohnenkamp, Anne: Textkritik und Textedition. In: Heinz Ludwig Arnold und Heinrich Detering (Hrsg.): *Grundzüge der Literaturwissenschaft*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1996. S. 179-204.
- Goethe, Johann Wolfgang: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. Frankfurter Ausgabe*. Hrsg. von Dieter Borchmayer u. a. 45 Bänden. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 1985-1998.
- : *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens. Münchner Ausgabe*. Hrsg. von Karl Richter u. a. 33 Bänden. München: Carl Hanser Verlag 1985-1998.
- : *Götz von Berlichingen*. Hrsg. von Bodo Plachta. Stuttgart: Anton Hiersemann Verlag 2017.
- Goethe, Johann Wolfgang u. a.: *Egmont*. Hrsg. von Bodo Plachta. Stuttgart: Anton Hiersemann Verlag 2019.
- Göttsche, Dirk: Ausgabentypen und Ausgabenbenutzer. In: Rüdiger Nutt-Kofoth u. a. (Hrsg.): *Text und Edition. Positionen und Perspektiven*. Berlin: Erich Schmidt Verlag 2000. S. 37-63.

- Hoffmann, Dierk O. und Zils, Harald: Hölderlin-Editionen. In: Rüdiger Nutt-Kofoth und Bodo Plachta (Hrsg.): *Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editions-geschichte*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag 2005. S. 199-245,
- Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke (Große Stuttgarter Ausgabe). Gedichte nach 1800. Text*. Bd. 2.1. Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag 1951.
- : *Sämtliche Werke (Große Stuttgarter Ausgabe). Gedichte nach 1800. Lesarten*. Bd. 2.2. Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag 1951.
- : *Sämtliche Werke (Kleiner Stuttgarter Ausgabe). Gedichte nach 1800*. Bd. 2. Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag 1953.
- Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft*. 34, 1990, S. 398-428.
- Kafka, Franz: *Schriften Tagebücher Briefe. Kritische Ausgabe*. Hrsg. von Malcolm Pasley u. a. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag 1982-
- : *Der Proceß. Roman. in der Fassung der Handschrift*. Hrsg. von Malcolm Pasley. Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag 1994.
- : *Historisch-kritische Ausgabe sämtlicher Handschriften, Drucke und Typoskripte*. Hrsg. von Roland Reuß und Peter Steangle. Frankfurt am Main: Stroemfeld/Roter Stern und Göttingen: Wallstein Verlag [bis 2020] 1997-
- Lessing, Gotthold Ephraim: *Minna von Barnhelm. Studienausgabe*. Hrsg. von Bodo Plachta. Stuttgart: Reclam 2020.
- : *Nathan der Weise*. Hrsg. von Bodo Plachta. Stuttgart: Anton Hiersemann Verlag 2023.
- Metzger, Stefan und Kreuzer, Johann: Editionen. In: Johann Kreuzer (Hrsg.): *Hölderlin Handbuch. Leben – Werk – Wirkung*. 2., Aufl. Berlin: J. B. Metzler Verlag 2020. S. 3-14.
- 明星聖子: 「編集の善悪の彼岸——カフカと草稿と編集文献学」『文学』第11巻第5号、2010年、188-202頁。
- : 「編集文献学の可能性」『書物学』第17巻、2019年、2-7頁。
- Nietzsche, Friedrich: *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*. Hrsg. von Giorgio Colli und Mozzino Montinari. Neuauflage. München/ New York: Deutscher Taschenbuch Verlag 1999.
- : *Sämtliche Briefe in 8 Bänden. Kritische Studienausgabe*. Hrsg. von Giorgio Colli und Mozzino Montinari. München/ New York: Deutscher Taschenbuch Verlag 2003.
- Nutt-Kofoth, Rüdiger: Goethe-Editionen. In: Rüdiger Nutt-Kofoth und Bodo Plachta (Hrsg.): *Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editions-geschichte*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag 2005. S. 95-116.
- Otto, Ulrich: Dichterwerkstatt oder Ehrengrab? Zum Problem der historisch-kritischen Ausgaben. Eine Diskussion. In: *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft*. 33, 1989. S. 3-6.
- Plachta, Bodo: *Editionswissenschaft. Eine Einführung in der Methode und Praxis der Edition neuerer Texte*. Stuttgart: Reclam 1997.
- : Nochmals. Für eine historische Edition! In: Peter Eisenberg (Hrsg.): *Der Jugend*

*zuliebe. Literarische Texte, für die Schule verändert.* Göttingen: Wallstein Verlag 2010. S. 95-103.

———: *Editionswissenschaft. Handbuch zu Geschichte, Methode und Praxis der neugermanistischen Edition.* Stuttgart: Anton Hiersemann Verlag 2020.

Roloff, Hans-Gerd: Beobachtungen zum Typ ‚Lese-‘ bzw. ‚Studien-Ausgaben‘. In: *editio. Internationales Jahrbuch für Editionswissenschaft.* 16, 2002. S. 133-142.

矢羽々崇：「著作集編集と『古典』の成立——ゲーテ『若きウェルテルの悩み』」明星聖子・納富信留編『テキストとは何か——編集文献学入門』慶應義塾大学出版会、2015年、25-46頁。

———：「4つのヘルダーリン著作集——史的批判版の実際」『書物学』第17巻、2019年、27-32頁。

[Zeller, Hans u. a.]: Empfehlung an Verlage von Studienmausgaben. In: *editio. Internationales Jahrbuch für Editionswissenschaft.* 2, 1988. S. 228.

## The “Studienausgabe” in Bodo Plachta’s Theory and Practice

Yu TOMIZUKA

This paper focuses on one type of edition in German textual scholarship: the “Studienausgabe”. In particular, it considers the theory and practice of Bodo Plachta (1956-), who has written two survey books on the subject (1997 and 2020) and edited a number of such editions. In 1997, Plachta argued that Hölderlin’s “Kleine Stuttgarter Ausgabe” is an ideal model for the “Studienausgabe”. What he has edited, however, has different characteristics. This experience is reflected in the content of the 2020 book. The book shows that there can be several approaches to editing the “Studienausgabe”: the advantage of this type of edition lies not only in the fact that it is a scholarly edition that can be realistically produced, as an alternative to the “historisch-kritische Ausgabe”, but also in the plurality of editorial approaches.